

立入禁止地区

梯偶は、香山の山頂に立ちつくした。ただ美

しい夕焼けを打ちながめていた。それはのど

かな春の日の夕暮れ時の光景であつた。

タクマが原の都の西方一帯からは、夕餉の

煙りが、天を目指して幾筋も幾筋も立ち昇っ

ており、邪馬台国の人々の豊かさを示してい

るように思えた。

か、とうとうたというのだろうか。目

を東の方に転すると、今の都の東方の一角

には、一筋の炊煙さえも見えなかつた。な

った。

現在の都の東側には、立ち昇る煙りが見

られないのですね。

怪訝な顔で、梯偶は誰に言うとなくつぶや

いた。

すると、奴佳鞮は、笑みを食んでこう説明

した。

1.927^P

雷 95^P
天つぎ改行 改行

火を噴く神山曰阿蘇山は、尊厳な山です。しかも、都の東に聳えている山ですか

ら、私達はともあかめていゝのです
*なお、皇太神宮年中行事の神事歌に「朝

座に鳴る雷も降りませ」という神招きがあり、一般に聚落の東方にあつて目立つ山は

神の朝の座とされたようである。(「日本書紀」(下)日本古典文学大系、岩波書店、三五〇

頁 九 参照) 奴佳鞮は、さらにこう続けた

「この神聖極まりない神山曰阿蘇山は、都との間に人家などあつてはなりません。私達倭人

にとそぐればごく当り前のことなのです。ですから、都の東の方には炊飯の煙はたちのぼる

なりのでございます」

*

1.928^P-1/4

阿蘇郡西原村
新・能物/史2
658^P

能本町の歴史30^P 阿蘇郡西原村。683/新設郡の一部、阿蘇郡西原村と
市町村番号43^P 和歌まちな、前夜 上益城郡 同原村を合併
新設市町村45ニシテ。オースタルサイトニシテ西原村とある

↑↑↑↑↑ 阿蘇 外輪山の西麓へ白川南岸
の丘陵地」とに挟まれた「西原村」の広大な
一帯には、考古学的にいつて、極めて
面白い現象が見られる。
■託麻村の東部にあたる「西原村」からは、
縄文時代（早期）から古墳時代に至るまで
各時代の土器が発見されている。
●特にこの地域は、中九州の縄文遺跡の宝庫
ともいうべきところで、多くの遺跡が
ある。
*縄文人達にとって「暮ら」易い場所だった
のだろうか
■けれども何と、不思議なことに、弥生時代
の前期・中期に相当する土器が無く、後期
頃になってようやく弥生式文化が見られる。
（第30表へ弥生前・中期参照）
つまり、西原村は、どうしたわけか、
弥生時代の前期から中期にかけてのみ、
きれいな空白状態なのである。
（外輪山西方）
●即ち、縄文時代の文化が栄えた阿蘇の高原
一帯は、弥生前期及び中期のみ、無人の地帯

なにかいからトル

白川の字もゴチ 瀬田もゴチ

・右頁全面に載せ。

・写真撮影17

F511。

・白川本流だけを

ブルーに塗り

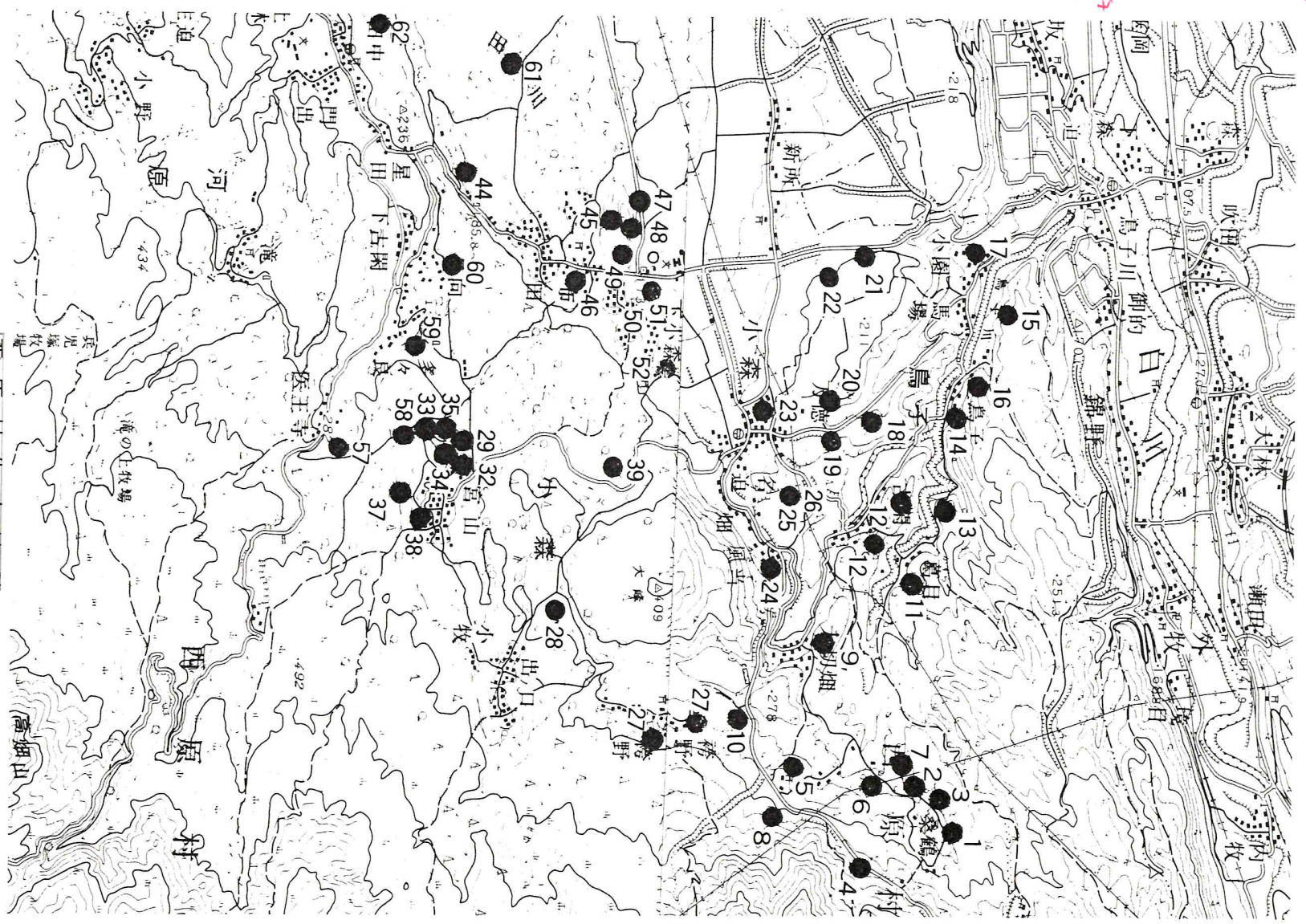
ほい。

(別紙参照)

・白川、瀬田、
西原村(2ヶ所)を
0.5ボタき
ゴチに変更。

・他はマモ。

1,928^p - 2/4



西原村をカミナリとして下をい。ゴチにす。 西原村もゴチ

1304 中川町 1404 54

第304図 西原村先史遺跡

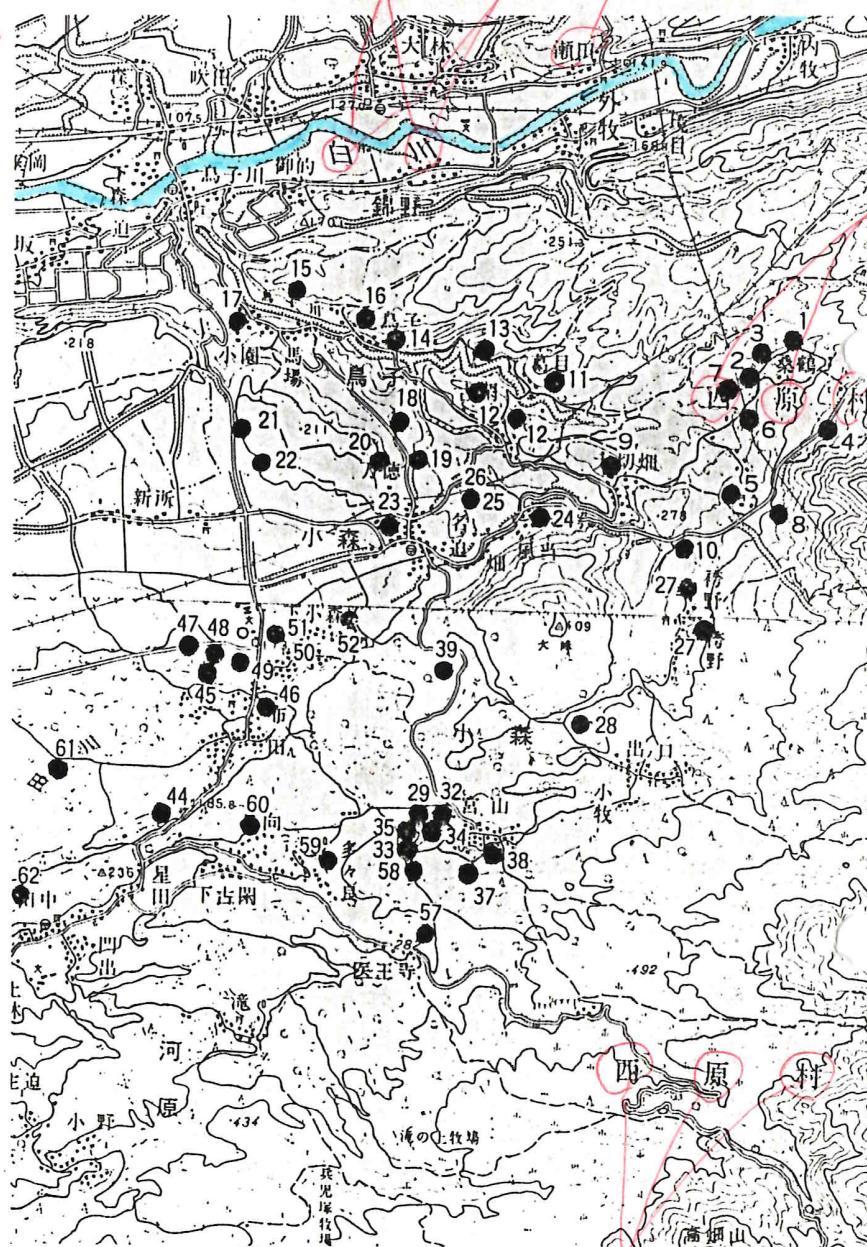
新・熊本の歴史 (1) 熊本日日新聞社、昭和54年5月15日 (第3刷) 発行、2/10頁参照

第0表 西原村先史遺跡

(参考) 1928^P-3/4)
* 川をブルーに塗って下さい。

地図	遺跡名	字名	先土器	縄文					弥生			古墳
				早	前	中	後	晩	前	中	後	
1	上桑鶴	小森		●	●			●				
2	本屋敷	〃	●	●	●	●						
3	古屋敷	〃	●								?	●
4	古池さん	〃		●	●	●	●				●	●
5	お池さん	〃		●	●	●	●				●	●
6	土橋	〃		●	●	●	●					
7	下桑鶴	〃		●	●	●	●				?	
8	うつさい	〃			●						?	●
9	後迫	〃		●	●						●	
15	下六段田	〃										●
16	陣の上	〃		●					?		●	
17	小園	〃		●	●	●	●				●	
18	樺の平	〃		?	●		●	●			●	●
19	桃木原	〃	?	●			●					
20	岡森	小森					●					
21	新所栗上ノ原	〃					●					
22	涼み塚	小森		●								
27	袴野	〃		●	●	●	●					●
28	出ノ口	宮山		●	●	●	●					●
29	宮山神社一帯	〃		●	●		●					●
30	宮山本村	〃		●								
48	王の迫			●	●	●	●	●			●	
49	べつじ		●	●		●	●				●	●
63	西原牧場			●		●	●					
64	谷頭				●		●	●			●	●

トン(次頁を見て下さい)



西原村先史遺跡

な
212^P
177^P

中心より約
150G

第30表

西原村先史遺跡

左欄金額に掲載。

・文字全て、
ゴザにす。

・朱線のみ、
太線(0.4mm)

にす。

・他は細線。

・波は、この面にて
なす。

〔御社手持ちの
波で結構です。〕

地 図	遺 跡 名	字	名	先土器	縄 文				弥 生		古 墳	
					早	前	中	後	晩	前		中
1	上 桑 鶴 敷	小	森		●	●			●			
2	本 屋 敷	〃	〃	●	●	●	●	●				
3	古 屋 敷	〃	〃	●		●					?	●
4	古 池 さん	〃	〃		●	●	●	●	●		●	●
5	お 池 さん	〃	〃		●	●	●	●	●		●	●
6	土 橋	〃	〃		●	●	●	●	●			
7	下 桑 鶴	〃	〃		●	●	●	●	●		?	
8	う つ さ い	〃	〃			●			●		?	●
9	後 迫	〃	〃		●	●					●	

15	下 六 段 旧	〃	〃										●
16	陣 の 上	〃	〃		●						?	●	
17	小 園	〃	〃		●	●	●	●	●			●	
18	櫓 の 平	〃	〃		?	●		●	●			●	●
19	桃 木 原	〃	〃	?	●			●	●				
20	岡 森	小	森				●						
21	新 所 栗 上ノ原	〃	〃				●						
22	涼 み 塚	小	森		●								

27	袴 野	〃	〃		●	●	●						●
28	出 ノ 口 宮 山				●	●	●	●	●				●
29	宮 山 神社一帯	〃	〃		●	●		●	●				●
30	宮 山 本 村	〃	〃		●								

48	玉 の 迫				●	●	●	●	●		●		
49	ベ つ じ			●	●		●		●		●		●

63	西 原 牧 場				●		●	●					
64	谷 頭					●		●	●			●	●

1928-4/4

130G

新・熊本県の歴史(1)熊本日日新聞社、昭和54年5月15日(第3期)発行、211頁参照
縄文晩期の土器は、弥生時代前・中期に作られた可能性があらう。

銅器文化の人々の
ところへ入った

こと

1,930^P

改訂

天つき
改訂

・また、先に述べたとおり、当初の弥生人達
はかなり排他的であったように思われる。
・稲作に好適な地と言えない「西原村」には
縄文人の子孫達が住み、弥生時代にも昔ながらに
縄文式土器が使用され続けたことであつたろう
か。・弥生土器でないから、見かけ上、縄文時代の
土器のように思えるだけなのか、知れない。
③そして、前一八〇年頃、同じく農耕文化を
持つ箕子の子孫達が渡来し、九州・山口地方
を奪い取ったものと思われる。

・では、弥生前期後半の前一八〇年頃以後の
箕子達の遺跡が、どうして「西原村」一帯に
見られないのだろうか。
・恐らく、

「当初の弥生人達と同様」農耕民族である箕子
の子孫達にとって、稲作に不便な「西原村」
一帯を居住地とする必要性が無かつたの
ころう
と思われる。

*「西原村」も、かゝたら箕子達は、縄文人の子孫達
や当初の弥生人達などを低湿地帯に住まわせ
て、稲作に従事させたのか、知れないか、想

④後国初代の崇神天皇の即位は、弥生中期の前九

極南改行

侵蝕 1/153
新・能本の/R (1) 209

707P

1.931P
天改行

七年だつたようである。その後倭人達は、南

の奴國で大きな力をつけていった。

・身こで箕子達は、倭人達の北上をくり止め

る為、緑川一帯に一大勢力を置いた。

・とはいえ、次第次第に箕子達の領土は、倭

人達によって侵蝕されてゆき、その国境は北

の方へと後退していったように思われる。(第

七章へ倭国の領土、北へ広がるの項において

既述)

⑤ こうしてやがて、西原村にー帯は、倭奴國

の領有地となつたことであらう。無人地

帯、左の地域に、弥生中期の頃の文化が

わずかながら姿をあらわしはじめているとい

う。(「新・能本の歴史」(4)能本日日新聞社

二一頁参照) 30表 1928=44 左頁

⑥ ーかなから、それ以上の急な進展は見ら

れない。

・あるいは、

へ太伯の後と自稱する支配者達が、タクマ

が原に都を定め、ー水以後、大切な水の源

箕子達の領有域の

42.9.12(日) 不可解 1921³ 2054^P 1.932^P

(こ)

である「西原村」一帯に住んでいた庶人を他の
の地へ移住させ、ここに住みつくことを禁じ
たので、———その結果として、この「西
原村」あたりの地からは、弥生中期の頃の土
器が少々は見出されるが、あまり数多くは発
見されない。✓
というところなのかも知れない。正始三年
とこのころから、弥生後期の後半（二四二年頃）
に、都がタクマが原から白川北岸の合志の台
地へ遷されたのであろう。（後述）
• ところで、この遷都後
へ再び、「西原村」一帯に庶人の居住が許
された。✓
と推察される。
こうしたわけで、
八咫麻村の東部にあたる「西原村」からは
縄文時代（早期）から古墳時代に至るまで、
各時代の土器が発見されているのに、——
弥生時代の前期から中期にかけてのみ、不可
解な空白状態があるのであらう。✓
と思われる。我田引水のそりりはまぬがねな
いから、参考迄に思うところを述べてみた。

(こ)

前方後円墳築造空白地区

また、非常に重要なことがある。(以下、

六八頁参照)

へ注いだ。白川沿いの地(現

・前方後円墳の分布をみると、
阿蘇外輪山の切欠部、立野、近傍から西流し、龍田山の南西あたりで有明通
在の白川中流域」に、前方後円墳が無い。

のである。(第198図)熊本県地域における前方後円墳の分布(参照)

木なお、龍田山の西方に位置する熊本市池田
町の富ノ尾古墳は前方後円墳といわれていた
しかし最近では否定的な意見もある、という。

ともあれ、

・白川と緑川との間に広がる「タクマが原」
に都を定めた時以後、白川流域一帯に

前方後円墳を築くことは憚られた。

・そこで、倭人達は、都から離れたところに

前方後円墳を築造した。

ように思われる。

*

最も古い時期の

前期様式の前方後円墳は、阿蘇谷の長目塚を除けば、海岸に近い所に作られており、

後期になってから、山手の方でも前方後円墳が作られるようになった。

そして、前方後円墳の分布を見ると、

熊本県北部の中心は、菊池川の中・下流域にあり、

熊本県南部の中心は、宇土半島南部から八代平野にかけての一带であり、

その他に、阿蘇谷と球磨盆地にも築かれて

いる、

という。

すなわち、極めて不自然なことに、

古墳時代の全期間を通じて、熊本県の中

央部にあたる白川(中)流域は、前方後円墳の空

白地区となっており、この一带に前方

後円墳は築かれないとは無かつた。

のだった。(「荒筋」第二編「墓制」参照)

*

H30(2018)5.14(月)~5(4日) 山頂
H31(2019)1.14(月)~1.15(3日) 西日 1692P
令和2(2020)1.28(火)~2.1(4日)

こと 1935P

「小町」146P~147P 同反

HV

こと
3/17 1/29
1/29

トIV
トIII
トII
トI
現在
奥津白浪立田山
白川南岸の二上の高山
小山山
神園
山の山頂は、双方共平らになつていて、
そこに城跡を思わせる堀切や石積の跡
が残っている。(能本の山、今江正知、能
本日、日新聞社、九六頁へ託麻三山)
この堀切、石積の用途や築造年代につい
は定かでないが、二つの山がタクマが原の台
地にひととき、抜人出て立っているの、軍
事あるいは天文等の爲に、一いつの時代に
か重要視されたことがあつたのであらう。
*
西日には、うねうねと続く白川の流が、あつた。
その泊瀬の白川は、一キラキラと輝く無数の光を
放ちながら、立田山の南、今の小積橋あたり
の海へと注ぎ込んでいた。

こと

あり

お

→ 3日目から
おかい

梯僦等は、角の奥に乘った。

奥

に乘った。

その

白川

の河原へと急な崖を下ってゆき、泊瀬の白川

(「伊水」に見立てられる川)を渡って、

対岸に着いた。(以下、第13回、五方分の地図参照)

対岸、そこはハ——現在、日出村と呼は

れてゐる小さな村里あたりであつたろうか。

・あるいは、この地、日出村は、合

志の土地の宮城の中心軸線上にあって、白川以

南の地域への出口と見なされてゐたのかも知れ

ないか、いうまでもなく想像以外の何物でも

ない。

こうして一路、新しい都の外郭城の正門(羅

城門)を目指した。

かなり急な葛折りの坂道を下梯僦らの一

行はあえぎながら登っていった。その急坂の

上の方には、今日の日の主賓の到来を歓迎え

る難升米や都市牛利の姿があった。

「ようこそお越し下さいました。御案内い

たしましように」

改修 小林 447
あまた
おす

張元溝 1057° 3/2

丘陵 562°
平町科字名 43~44°
1947°

1.940° 新(11)-967

国洛辞典 982°
堀 = 掘

何く水となく気遣う難升米のほころんだ笑
顔には、隠しのような誇らしさがあつた。
ややにいて、美しい水をたたえた小川のほ
とりに到った時、難升米はこう言った。
「御覧ください、梯子殿。新しい都城の前面
を一直線状に流れてゐるこの川が、私共の
口路水口です。しかし、掘り割って作った川
です。ので、別名曰堀川口とも呼んでおりま
す」
④ なお、ここに、次のように仮定した。
① 阿蘇、外輪山の西麓、白州北岸の「大津町」
あたりへ引き入れられ、室・入道水・柳
水・原水・上堀川・下堀川を経て、群山の南
側を通り、外郭城南面に沿って西方へ真直ぐ
流れて行き、羅城門の前を過ぎ、なおも
西へ西へと真直ぐ導かれていた。
② 一方、この当時、外郭城の西側あたりを蛇
行しながら南流する小川があつた。壁に沿って掘
りだか、後年の西晋時代に、洛陽外郭城西
うれた溝（穀水の分流を北から南へ流下させ
る為）に開鑿された曰張方溝口と、また、く
った改修された。その小川は真直ぐ

559.7.15(月) 酉
A 7.3.18(土) 酉

清水 地名辞典
ハ景水谷 792P
1251P
2055P - 1/3

はけのみや
ハ景水谷 1942 - 3/2 16P
1.941
ゆうしゅう 2246P
1896P

洛陽からに記86
1165 1/2
金 1011P
1163P

また後代、故あって、この小川は下
坪井川と称されることになった
と考えてみることにしたい。(第十四章、洛
陽の変遷の歴史へ千金堰の項参照)
なるほど、坪井川は、もともとから今の流
水の通りへほぼ真直ぐであつて、また、
改称されたわけではないのかも知れない。
一かゝともあれ、この物語においては、正
始二年(二四一)當時すでに、
へ西流する日堰川と、南流する日坪井川
とは、外郭城の西南の隅で合流し、その
のち、美しい清泉が湧出する清水村の水源地
(現在のハ景水谷)へ通流し、ハケミヤと云
ふを経て、龍田山の西麓を南西流れ下り、
有明海へ注いでいたのであらう。
と想定し、話を進めてゆきたい。

*

龍田山の西麓を南流する
当初、龍田川と呼ばれていたのではなからうか

137

$$\frac{235}{130} = 1.807 \approx 1.8$$



写真図版 6 肥後国の『^{たつだやま}龍田山』(151.6^{しらかわ}米) および『白川』

- ・熊本市街地(明午橋)から、北東方向を望む。
- ・子飼橋が見えている。左側手前には、^{めいごばし}藤崎八幡宮の森がある。

松崎順子さん、平成21年6月撮影

地名辞 1251^r
能本の地名 (土) 82^p ① 2055^p
1.943^p

古今 153^p

伊勢物語 173^p 平城天皇 1986^p
古今 153^p 在原業平 74^p

「形」でない。

米

の、混乱する結果になったのであろう。
なお、こうした龍田川の歴史的背景
をふまえて、平城天皇の孫、在原業平朝臣は
次の歌を詠んだのかも知れない。
ちはやぶる 神代もきかず 龍田川
韓紅に 水くくるとは経
その昔の邪馬合国の龍田川 (今の坪井川)
か、紅葉で彩られたなどとは聞いたことかな
い。その小なのに、大和国の龍田川には、真紅の
赤な紅葉が美しく浮んでゐる。まるで韓紅色
の真紅の絞り模様のついた絹地を晒しているよう
な美しさだ。
といった意味でもあろうか。(「古今集」秋歌下
二九四「伊勢物語」百六段。百人一首参照)
※この因みに述べると、堀川と坪井川
川との合流地点のすぐ下流の八景水谷には
紅葉の名所としてではなく、桜の花見客で賑
う景勝の地として知られてゐる。

⑤ 1280^P

1944^P

⑤ 1280^P
(4)-103^P 表16図と同図(新たに掲載)

■では、ここに、
曹魏の次の

①洛陽の都(西晋時代の都)

②和馬台国の都(合志原にあつたと想像さ

る都)

③伊勢神宮

の三者の、平面的な構成について見較べてみ

よう。第④洛陽の都・和馬台国の都・伊勢神宮の平面構想(参照)

■こゝら三者には、

へ境域南面に沿つて東西方向に流れる川が

あり、そして又、境域西面に沿つて南北方向

に流れる川がある

という共通点がある。

■そして興味深いことに、ずっと後代の平城

京において、

へ外郭城南面に築かれた幅五段の城壁の

南側に沿つて、
幅十五、十八

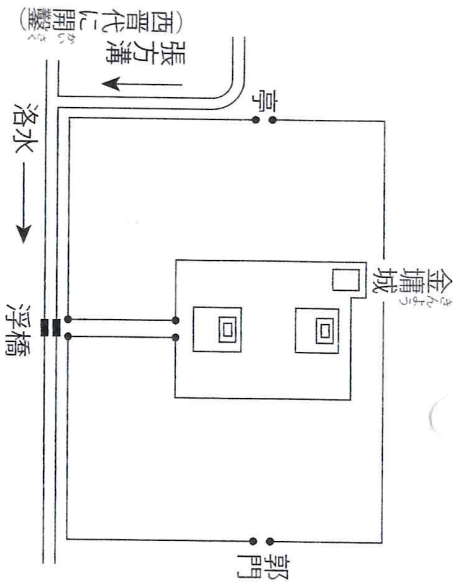
程もある大きな堀が設けられていた

ようである。朝日新聞昭和五十八年四月二

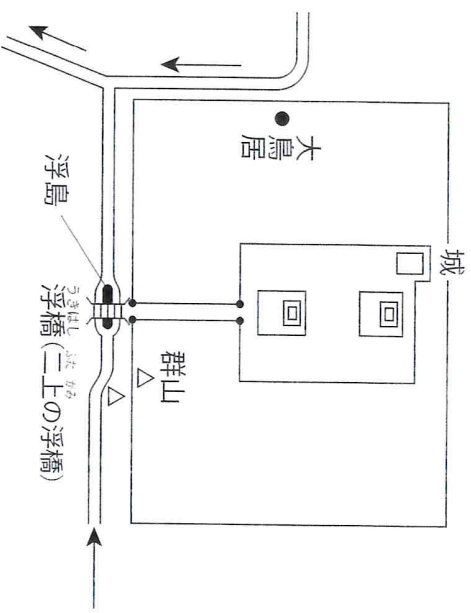
日。同昭和五十七年六月二十二日付参照

※もつとも、平城京の外郭城の西壁に沿う

川が、
現時点では分らない。のかどうかにつ



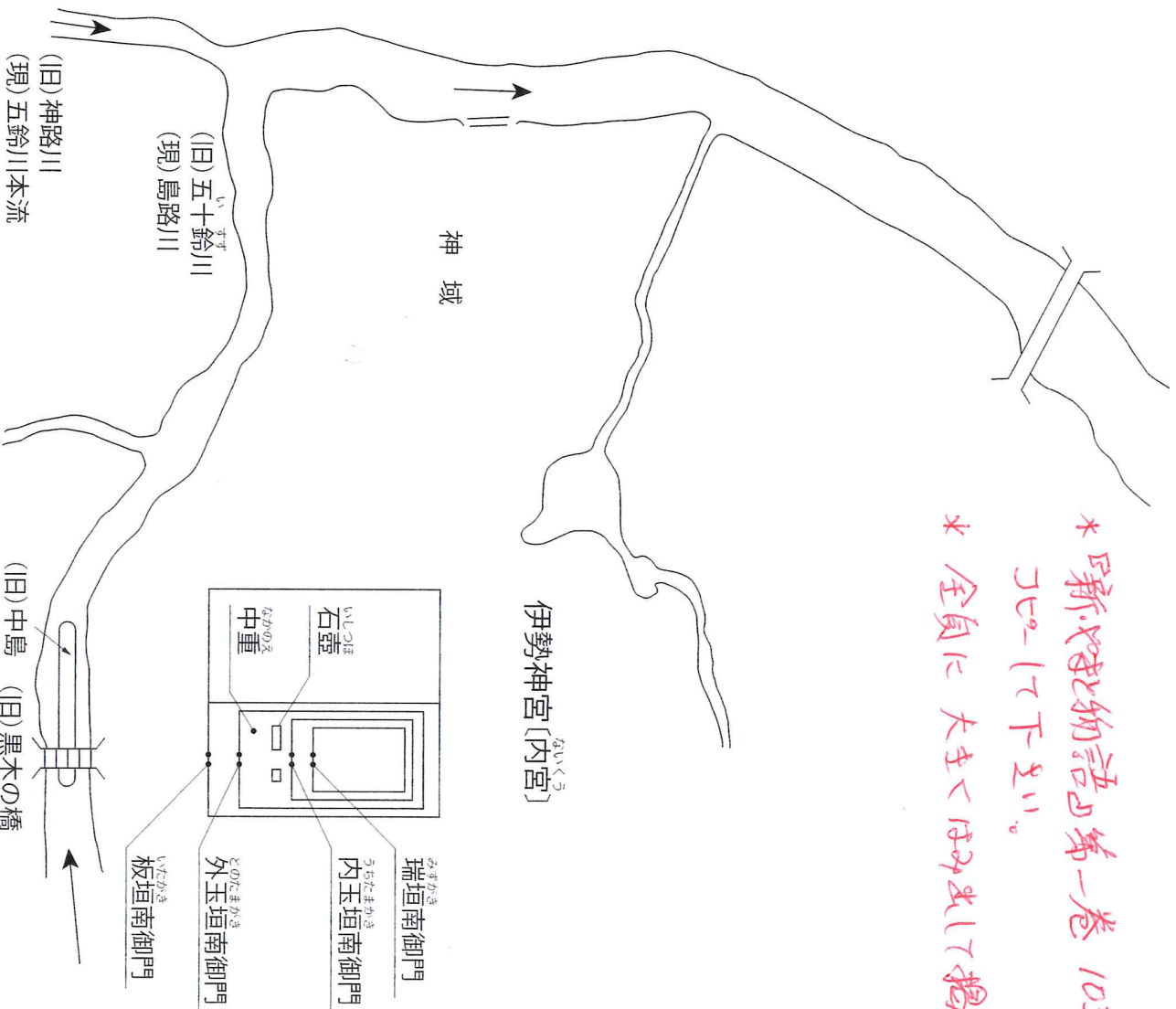
洛陽の都想像図



邪馬台国の都想像図

*『新・やまと物語』第一巻 103頁から
 コピーして下さい。
 * 全員に大きくはみ出して掲載下さい。

1945P



平城京の跡の線に在り

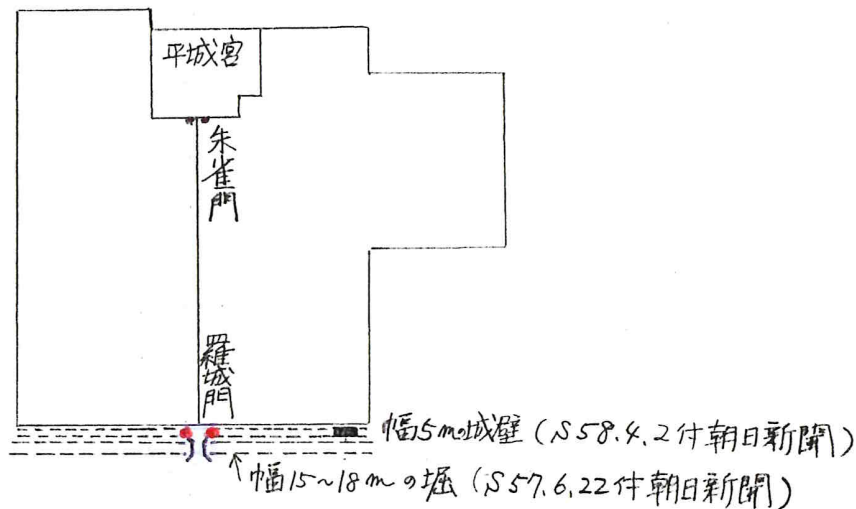
本館の地は → すぐと後へ移す
(聖徳太子營迄未に入(202))

1,946^P

1946

1946

- ・ トレースして下さい。
- ・ 実線の太さ 0.3 ミリ
- ・ 文字は、全てゴ4



1469 第306図

(四) 平城京の平面構成

- ・ 堀は、曹魏時代の洛陽城外を流れる洛水に見立てられたのではなかろうか。

16 行 十二 六 時、二十五 五 五 とす。

堀川 堀新 2051 (堀) 11林 246
引水 市町 44
1940¹-3/2 1.947¹-1/2
14人 小材 334
6km
3.5km 2km
209 二つたの 宏大 = 広大 148¹

この堀川の全長は約二十五^五にもなる(第14図参照)
白川の河岸段丘上を東から西へ流れる

白川の水を引き入れる堀川の構想

白川北岸に広がる宏大な台地の南端部あたり

白川の流氷とほぼ平行に東から西へと流れてゐる堀川の歴史について、見て

おく々とにみよう。(以下第14図五方分の地図参照)

現在、阿蘇外輪山西端の切欠部から西流する白川の水の一部が、堀田上井手(立野の西約二^五)および堀田下井手(立野の

西約三・五)において取水され、それぞれ白川北岸にそそり立つ峻壁に形成された別々の

流路を通じて引水(立野の西約八^五)犬津の東一^五)という所へ導びかれ、

そいて、引水に集められた水がそこを流るに長さ十^五時ほどある堀割を西流して八

景水谷近傍へ至り、植木の方から南流してきた堀井川と合流し、龍田山の西方を南へ

流水下って有明海へと注ぐ。白川の水を引き入れる構想といい、堀川の

1,947⁹- $\frac{3}{2}$

次頁から

溝といひ、——こ水等は明らかに自然に成
ったもので、~~は~~なくて、人工のものである。
いえよう。
■それでは、このような壮大な計画を最初に
打ち出したのは、何時のことだったのだろう
か。
■あるいは、江南の地で高度な水利技術を身
につけていた太伯の後と自称する者達が、三
世紀半ば頃、——洛水に相当する川を作る
当て、この巧みな集水方法を採用したのかも
知れない。
※なお、
へこの当時（三世紀半ば）には、日瀬田上井
手は作られておらず、——日瀬田下井手
の所、~~も~~しくはその近傍から取水された水が
日堀川に導びかれていた。
と考えてみたい。
*

くぼた 和銅 2379 菊池郡誌 44
かみき 新 486
くぼた 和銅 2379 菊池郡誌 44
かみき 新 486
くぼた 和銅 2379 菊池郡誌 44
かみき 新 486

1,948^P

うら 218^P

セミ 1235⁴

と、こうが、後年の日聖徳太子への金人の夢告
以降、瀬田あたりの打ち捨てられてしまったの
う。取水施設は、堀川が、灌漑用水路として
見直される時がやってきた。
合志原をうるおす為の取水口（集水口）が、新し
く瀬田に築かれて、再び、白川の水が
堀川へ導びかれた、と推察される。
とはいえ、往古のことを知らない人々は、
へ始めて、この灌漑用水路の大事業が成っ
た。
と、いって、歓喜したのではなかううか。
文献によると、
元明帝の和銅年中（七〇八―七一五）
国司阿部乙名という者が、窪田井手（瀬田下井
手ともいう）を始めて開鑿金した。
と伝え、（以下）帝国地名辞典に太田爲三郎
名著出版、八六九頁へ瀬田。『菊池郡誌』
名著出版、五一―五四頁参照）

けい
糸の目 2 小杯 7
糸の目 6 75-4

$\frac{1}{100} \times \frac{1}{100} = \frac{1}{10000}$
 $\frac{1}{100} \times 100 = \frac{1}{100}$

政行

西へは直線、状に流れる堀割部

日 大津原頭 (東からの最東端部の意か) に概ぐ
を得たり、茲に於て数百町歩の水田を養ひ、
水田なる村里大いに是を利とし、衆庶永く其
恩澤を蒙るに至れり。云々

という。

つまり、察するところ、
〔これより以西の〕
細川侯が、頼田上井手を開發し、白川の
水を、大津原頭の口引水に導いて堀川に
溉いだので、茲に於て水下の村里は〔細々
と流れて〕いた堀川の水が枯れる心配もなくな
り、大いに是を喜んだ。』
という意味なので五うう。

とすれは、

へ大津原頭から以西の堀川は、この水利工
事が行われる以前、すでに存在していた。
というに思われる。 (五万分の一地図参照)

この物語では、

へ正始二年(二四一)の春には、
志原に長大な堀川が完成して、その
堀川は、幅広で真直ぐだった。その
と解してみたい。水位は、下流の堰によって自由に

コケヨ ケー20 20×20

430(2018)5.15(火)~5.15(4回)
令和2(2020)10.12(月)~10.14(4回)

$\rightarrow 43.12.30(\text{月}) \oplus$
 $47.3.18(\text{日}) \oplus$

1871.10.20
梁夢秋抄，後自河上
大20 801 梁夢秋抄 236 上皇と福。

調整できるし、
流路や川幅も
変更可能である

もしかいたう、平安・鎌倉時代の「白河

天皇
L
(白河上皇)
、
7
堀河天皇
L
、
7
後白

河天皇
↳ (後白河上皇)
、
「後堀河天皇」
↳ の

御名と文水7113
白河川
堀河川
堀河川

名は、この時代頃までは、格別重要

な意味をもつていたのかも知れない。

弓水と木、
 た^ん単に、
 平安京を流
 水子口
 白

河
に
や
日
堀
川
に
の
名
を
冠
した
だけ
なの
だろ
う

か
へ